

2004年度宇都宮大学公開講座「地方自治体入門」を振り返って

中村祐司（担当教員）

2004年6月22日

いよいよ、「地方自治体入門」も本日で最終回を迎えることとなった。市町村合併という極めて難しい問題や、「三位一体改革」などあまり一般にはぴんとこないテーマを取り上げた時も、「さすがはこの講座を受講してきた人たちだけのことはある」、と思わせるような鋭い質問や虚をつかれるような問題意識が提示されることが多かった。やはり、公開講座は自分にとっても、地域社会における多様で魅力的な人々と接することができる楽しくかつ貴重な、そして学問意欲を否応なく刺激される機会だということを確認した。

大学キャンパス内で行っている毎回の授業について、例えば「日誌」を書き続けることは容易なようで意外と難しい。しかし、今回のような受講生との出会いと交流を経験させてもらえる限り、そのことが原動力となって研究や教育に立ち向かっていく勇気が得られることもまた事実である。以下、研究室ホームページに掲載した「教育日誌」から、6回に及んだ「地方自治体入門」の箇所を紹介することで、受講生に対する感謝と今後のご活躍を期待する言葉に代えたい。

第1回「地方自治入門」(2004年5月18日)

6回シリーズの第1回目。まずは自己紹介を兼ねて自分が今までにやってきたことと、最近の関心課題について述べ、過去2年のこの講座におけるレポートのまえがきを示した後に、5名の受講生に自己紹介してもらおう。その後市町村合併について意見交換。状況についての共通認識を得たいとのことで、今日に至るまでの合併をとりまく推移を頭に入っている限りで説明した。次回も県内の市町村合併状況を説明した上で、双方向型の講座内容にしていきたい。

第2回「地方自治入門」(2004年5月25日)

5月15日の「地方自治を学ぶ会」で用いたレジメを使用して、県内市町村合併状況について説明。その後、受講生の一人から南河内町、石橋町、国分寺町における住民の視点に立った合併の成り行きと取組みに関する貴重な資料が提供された。意見交換では地方議員の役割や合併目的、経済性という単一指標で当該地域の活性化を評価することの是非など、いろいろな視点が提供され興味深かった。次回は直接請求のしくみや日本の地方自治制度の経緯、地域自治制度、編入合併と対等合併それぞれの場合の在任特例と定数特例について取り扱っていきたい。

第3回「地方自治体入門」(2004年6月1日)

編入合併と対等合併の場合の定数特例と在任特例の基本的ケースについて整理する。市町村合併推進策の骨組みや政府のねらいとするところについてもレジメを配布して説明。その後、地域自治制度のモデルを示して基本的なイメージをつかんでもらった。休憩をはさんで意見交換。実際に地域社会で人々と接しながら、行政サービスや議会のあり方を改善しようとしている地方議員の動きや、地方議員活動に対して住民サイドから見た認識などをもとに、明確な解答は見出せなかったものの、率直に話し合った。この時間でなされたような議論が県内の津々浦々でなされれば、合併問題をめぐってそれが大きなインパクトとなるのという思いを抱いた。

第4回「地方自治体入門」(2004年6月8日)

受講生から要望があったのと、先月23日の矢板市でのごみ問題シンポジウムにおける講演が時間切れ(というは時間配分に失敗)のため不完全燃焼で終わったこともあり、今回の公開講座で取り上げた。PDAはノートパソコンほどがさばらないのでこのような時に大変便利である。生活している限り誰もが関わる問題でもあり、討議では、環境教育を重視すべき、いや教員の負担からいって家庭教育に重きを置くべき、そもそも行政の取組みに問題があるのではないか、透明性のもとで発生抑制をもっと企業に求めていかなければいけない、メーカー側のコスト負担やリユースをさらに重視する方向への容器包装リサイクル法の改正に向けた運動がなされている、などいろいろな意見が出た。次回は三位一体改革と情報公開について話題提供する。

第5回「地方自治体入門」(2004年6月15日)

三位一体改革の内容についてその枠組みを説明。補助金、地方交付税、税源移譲をめぐる財務省と総務省、地方自治体の意図するところを新聞記事をもとに整理してみた。受講生の発言を聞きながら、こうした問題を住民の目線に立って理解することの大切さを痛感した。情報公開についても触れる。電子媒体に代表される大量でスピーディーな情報社会の飛躍的な利便性の向上と、それに内在する個人情報漏洩など負の側面について意見交換した。早いもので来週で最終回となる。何らかの痕跡を残したく、小文を書いてきてもらうことを約束した。

第6回「地方自治体入門」(2004年6月22日)

5月中旬から始めた6回シリーズの「地方自治体入門」も今日で最終回。5名の受講生とは気兼ねなく率直にコミュニケーションを行うことができた。少人数であったがゆえに、かえって異なる世代層が一同に会する魅力があった。正直なところ「世代間ギャップ間」

は全く感じることなく、むしろ受講生それぞれから新鮮な発想をもらって、今後の研究活動のヒントと元気を得ることが多かった。今日は今まで自分がやってきたスポーツ政策研究の経緯を話し、数年前からは、他の政策領域についてももっと貪欲に学ぼうと心掛けていることを強調した。合併問題にも少し触れた。修了証書を手渡す際には、大変名残惜しかった。しかし、今回、受講生が毎回の講座で示し続けてくれた地域社会に対する熱い問題意識がある限り、これからも何かの機会に必ず再会できるはずであると無理やり自分を納得させた。どうかお元気で受講生がそれぞれのやり方で、それぞれのスタイルで当該地域社会で生き生きと過ごしていただければと切に願っている。